

坊ちゃんと銀河鉄道の夜のオノマトペの比較

東 凜

1 はじめに

宮沢賢治が「優れたオノマトペの使い手」や「オノマトペの達人」と称される所以は、ほとんどの作品にもオノマトペが溢れ、その種類が、私たちが想像できないくらい豊富であり、しかも私たちが日常的に使っている、いわゆる慣習的オノマトペではなく賢治独特の非慣習的なオノマトペが随所に見られるからである。(田守 2011) 本稿では、そんな賢治のとりわけ独特であるオノマトペと他の文学者が使うオノマトペを比較対照させ、擬音語・擬態語への理解を深めることを目的とする。

オノマトペとは物の音や動物の鳴き声の感じを表した擬音語および事物の状態や身振りの感じを表した擬態語の総称である。一般的に擬音語・擬態語は、いろいろな音や様子を表して、受け取る人に直感的にあるイメージを想起させる効果を持つ。

夏目漱石の『坊ちゃん』と宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』からオノマトペを抽出し、比較対照する。

取り上げる文献について簡単に説明する。

『坊ちゃん』とは、夏目漱石によって書かれた日本の中編小説である。曲がったことが大嫌いで無鉄砲な主人公「坊ちゃん」は、両親と兄から冷遇されていたが唯一の味方であった下女の清とともに子供時代を過ごす。大人になった坊ちゃんは中学校の教師となるが反りの合わない人々や規則などに縛られながらも教師生活を送っていくという物語である。一人称視点で構成されており、坊ちゃんの心情が読み取りやすい作品である。

『銀河鉄道の夜』とは、宮沢賢治によって書かれた童話小説である。いじめられっ子で孤独な主人公「ジョバンニ」とその友人「カムパネルラ」が銀河鉄道に乗って、旅をし、さまざまな人と出会い、最終的にカムパネルラと別れる物語である。三人称視点で構成されている。賢治らしい独特なオノマトペが多く存在する作品である。

2 方法

オノマトペの認定基準について説明する。「●○●○」(ぐいぐい、ぎゅうぎゅう等)「●○り」(ぶつり、ざぐり等)の形を主に抽出し辞書と照らし合わせる。今回は「●っり」(きっかり、はっきり等)も含むものとする。「●○●○」と「●○●○●○●○」は同一のものとししない。(ごごと、ごごとごごと等)見出し語が、ほとんど「と」をつけてしか用いられないものは(と)と表記する。

笑い声(ワハハハハ等)は含まないものとする。

2 語数と語彙

『坊ちゃん』に使用されるオノマトペの語彙とその語数を抽出すると、次の表 1 のようになる。

表 1 『坊ちゃん』におけるオノマトペの語彙と語数

ぐいぐい 3 例	ぐい(と) 1 例	ぎゅうぎゅう 1 例	のそのそ 1 例
すぼり(と) 1 例	ぶう(と) 1 例	ざぶり(と) 1 例	うとうと 1 例
むしゃむしゃ 2 例	にやにや 1 例	がらがら 1 例	ぱち(と) 1 例
がやがや 3 例	のびのび 1 例	ぐっすり 1 例	むずむず 1 例
ゆるゆる 1 例	ぽつ然 1 例	ぽかん 1 例	どんどん 1 例
どしん(と) 1 例	ざらざら 1 例	ぐちゃり 1 例	ぶんぶん 1 例
のつそつ 1 例	どどん、どん、どん 1 例	どたばた 1 例	むくり(と) 1 例
ぬらぬら 1 例	うとうと 1 例	どたり(と) 1 例	ぼりぼり 1 例
ぴくぴく 1 例	ぴく(と) 1 例	ぽちゃり 1 例	ざぶざぶ 1 例
くすくす 1 例	ジュと 1 例	ヒューと 1 例	ざぐり(と) 1 例
むっくり 1 例	ぐうぐう 2 例	ぐるぐる 2 例	すたすた 1 例
ぴんぴん 1 例	にこにこ 1 例	さらりさらり 1 例	べらべら 1 例
ピュー 1 例	ぶらぶら 2 例	そこそこ 1 例	ゆるゆる 1 例
ねちねち 1 例	ぶつり(と) 1 例	えへんえへん 1 例	チュー 2 例
ぬっ(と) 1 例	滔々(と) 1 例	ぴたり(と) 1 例	わんわん 1 例
べらべら 1 例	ぽかぽか 1 例	よろよろ 2 例	どんどこ 1 例
ちゃきりん 1 例	ぱちぱち 1 例	ごろり(と) 1 例	ふわふわ 1 例
ぼん(と) 1 例	しょっ(と) 1 例	ぽかり(と) 2 例	だらだら 1 例
うじゃうじゃ 1 例	ぼこぼん 4 例	冷々 1 例	ぽたぽた 1 例
ぽかんぽかん 1 例	ひゅう(と) 2 例	ずたずた 1 例	ぴりぴり 1 例
ぴかぴか 1 例	からんからん 1 例	じっ(と) 1 例	

同様に『銀河鉄道の夜』の語彙とその語数を抽出すると次の表 2 のようになる。

表2 『銀河鉄道の夜』におけるオノマトペの語彙と語数

どしどし 1例	だぶだぶ 1例	ばたりばたり 1例	むしゃむしゃ 1例
しいん(と) 2例	ばっ(と) 1例	きいん(と) 1例	くるっくる 1例
くるくる 4例	ぐるぐる 2例	もじもじ 1例	じっ(と) 3例
ぼうっ(と) 2例	ぼうっ(と) 1例	ぼおっ(と) 1例	しんしん 1例
そろそろ 1例	どきっ(と) 1例	ぴよんぴよん 5例	ちらちら 5例
ちらっ(と) 2例	ぺかぺか 1例	りん(と) 1例	すきっ(と) 1例
ごとごとごと 1例	ごとごとごとごと 1例	ごとごと 1例	さらさらさらさら 1例
さやさや 1例	こつこつ 1例	ざわざわ 1例	ぎらっ(と) 1例
どきどき 1例	くしゃくしゃ 1例	つるつる 1例	ぎざぎざ 1例
きらっ(と) 1例	きらっきら 1例	ぴくぴく 1例	ころんころん 1例
ぴたっと 2例	すっ(と) 1例	ぼくぼく 1例	にやにや 1例
がらん(と) 1例	ぎゃあぎゃあ 1例	ほくほく 1例	もじもじ 1例
くつくつ 1例	つやつや 1例	がたがた 1例	きっかり 1例
ぐったり 1例	ぱっちり 1例	にこにこにこにこ 1例	すうっ(と) 2例
ぴん(と) 1例	ぴたっ(と) 1例	どんどんどんどん 1例	ギーギーフーギーギ ーフー 1例
ぽかっ(と) 1例	ひそひそ 1例	わくわくわくわく 1例	くるっ(と) 1例
さあ(と) 1例	ぴかぴか 1例	どかどか 1例	ぱっ(と) 2例
どんどん 1例	おずおず 1例	ぼろぼろ 1例	しくしく 1例
ぞくっ(と) 1例	ぴしゃあん 1例	そわそわ 1例	がらん(と) 1例
さんさん 1例	ぎくっ(と) 1例	どほん 1例	しげしげ 1例

『坊ちゃん』に使用されるオノマトペの語彙の総数は文字数96,355文字に対し83個である。『銀河鉄道の夜』の使用されるオノマトペの語彙の総数は41,903文字に対し80個である。よって『銀河鉄道の夜』の方が『坊ちゃん』よりも読んでいる時に触れるオノマトペが多いことがわかる。

3 同音異議のオノマトペ

『坊ちゃん』から抽出した文章を A、『銀河鉄道の夜』から抽出した文章を B とする。同じオノマトペが複数回使用されている場合は A1、A2 と記す。

A1: 盆を持って給仕をしながらやににやにや笑っている。

A2: 「喜んでいるところではない。大騒ぎです。」と野だはにやにや笑った。

B: 燈台守はにやにや笑って、少し伸び上がるようにしながら、2 人の横の窓の外をのぞきました。

「にやにや」は思い通りにことが運んだ時などに薄ら笑いを浮かべる様子を意味する擬態語である。A1、A2、B は全てこの意味に当てはまる。

A: 到底あなたのおっしゃる通りにやできません、この辞表は返します、と云ったら校長は狸のよ
うな目をぱちつかせておれの顔を見ていた。

B: にわかに男の子がぱちり目を開いて云いました。

A、B どちらも、驚いて目を丸くする様子を表している。A も B も同じ「ぱち」の語が含まれているが、Aの方がBより複数回行われた印象を与えている。

A1: 寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。

A2: いくらどしんと倒れてもかまわない。

A3: 2 階が落っこちるほどどんどん、どん、どんと拍子をとって床板を踏み鳴らす音が聞こえた。

B: けれどもけれどもどしどしは手を大きく振ってどしどし学校の門を出てきました。

B2: 声もなくどんどん流れていき、

B3: どんどんどんどん汽車は走って行きました。

A1、A2、A3 は重いものが落下したり、衝突したりする様子を表す擬音語である。A1 は連続してぶつかる音である。一方 B1 は力強く地面を踏み付ける様子、またその音のことである。教室の 17 人が今日の星祭のための烏瓜を取りに行く約束をしている中、ジョバンニがただ 1 人家へと帰っていく場面である。ただ歩いて帰るなら「とことこ」でも許容されるだろうが、「どしどし」にしたことで、ジョバンニの強い意思が伺える。B2 と B3 は物事が非常に勢いよく進行することを示す擬態語である。B3 はどんどんを 2 回繰り返すことで汽車が遠のいていくイメージを想像させる効果がある。

A:お婆さんがにこにこして

B:お母さんがね立派な戸棚や本があるところに居てね、ぼくの方を見て手を出してにこにこ
にこにこ笑ったよ。

どちらも嬉しそうに穏やかに笑う様子を意味する。B は「にこにこ」を2回繰り返してお母さんが幸せそうにしていることが強調されている。

A1:怒っているのか目をぐるぐる廻しちや時々おれの方を見る。

A2:ぐるぐる、閑静で住みよさそうな所をあるいているうち、

B1:1 秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるくるとうごいたり、

B2:その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました

B3:鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。

B4:宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおった玉が輪になって、しずかにくるくるまわっていました。

B5:折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって床に落ちるまでの間
にはすうっと、灰いろに光って蒸発してしまうのでした。

B6:その葉はぐるぐるに縮れ

B7:カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。

「くるくる」「ぐるぐる」は①ものが繰り返し回転する様子。②長いものを何かに巻きつけている様子を表す。A1 は会議の際、山嵐が坊ちゃんに視線を送っている場面である。長い机を囲んで他の教師が座っており、山嵐がその教師の様子を眺めている眼の動きを「ぐるぐる」として表している。B7 も目の動きを表す擬態語である。A2 は辞書的定義には当てはまらないが、日常でも「ぐるぐる歩き回る」等と用いられるので一般的に許容できる。B1 は「くるくる」の間に促音が使われている。B2、B3 は②に当てはまる。B4 は自動詞「回る」を装飾する擬態語である。B5、B6 は修飾の対象の名詞が螺旋状になっている様子を示している。B7 は自動詞「回る」を修飾する擬態語である。

A:読みかけた手紙を庭の方になびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらり
さらりと鳴って

B:銀色の空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさらゆられてうごいて、波を立て
ているのでした。

通常「さらさら」は①粘り気や摩擦が少ない様子。②水が浅い場所を静かに流れる様子を表す際に用いられる。どちらもこれらの意味を含んでいない。A は紙が風に靡かれている様子を爽やかに表現している。B も A 同様風が関係している。すすきが擦れ合う音を美しく表している。

A:同時に列はぴたりと留まる。

B1:ぴたっと鳥の群は通らなくなり、

B2:インデアンはぴたっと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。

「ぴたっ」は続いていた動作や状況が突然、完全に止まるという意味を持つ。抽出した 3 つはこれに当てはまる。B1、B2 に関して促音を用いることで、瞬間に止まったことを強調していると考ええる。

A1:高知のぴかぴか踊り

A2:この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、

B1:草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、

B2:すぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。

A1 は名詞の一部である。「ぴかぴか」は明るい光が点滅する様子を意味しているこれは A2、B1 に当てはまる。B2 に関して母音を i から e に変えることで可愛らしさが生まれている。

A:なんだかぴくぴくと糸に当たるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きているものでなくちゃ、こうぴくつく訳がない。

B:ところがその人は別に怒ったわけでもなく、頬をぴくぴくしながら返事をしました。

「ぴくぴく」は小刻みに微妙に振動する様子を表すオノマトペである。A は釣りをしている場面である。釣り糸に物が触れて、微妙に振動していることからこれは一般的な意味に当てはまる。「ぴくつく」はぴくが動詞の一部になっている。B は対象の頬が小刻みに震えていることが想像できる。

A1:黒い団子が、しょっと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い煙がが傘の骨のように開いて、

A2:いきなり拳骨で、野だの頭をぽかりと喰わしてやった。

A3:ぽかりと殴る。

A4:ぽかぽかなぐる。

A5:ぽかんぽかんと兩人でなぐったら

B:その小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにぽかっと消え 2 人が過ぎて行く時また点くのでした。

「ぽかぽか」は連続して軽く殴る様子、またその音を意味する。A1 は打ち上げ花火を見ている

場面である。花火玉が空に上がり割れていく様子を表している。これは辞書の意味に当てはまらない。ものが割れることを表す際よく使われるのは「ぱかっ」だろう。閉じていたものが突然大きく開く様子、またその音を意味しているので、花火玉が割れる様子に当てはまる。そんな促音が含まれる「ぱかっ」を使わず、「り」を加えた「ぽかり」を使うことで余韻が生まれている。また一文字目の母音をɑではなくoにすることで、口の形がoになる。oの形は丸を彷彿させるので、丸い形をしたもの、すなわち花火玉が割れることを、鮮明に表している。A2、A3、A4は赤シャツを山嵐と坊ちゃんが殴る場面である。これらの「ぽかぽか」は辞書の意味に当てはまる。濁点ではなく半濁点を用いることで柔らかい雰囲気になっている。また同一の表現を使わないことで文章にリズムが生まれている。Bは辞書の意味に当てはまらない。「ぽかっ」は豆いろの火を主語とする「消える」の述語に係っているが、一般的に火が消える際これは使わない。「ぽかっ」という表現は、「心にぽっかりと穴が空いた」のように丸いものを想起させる。このことから豆色の火は丸いということがイメージできる。また、「小さな豆色の火がちょうど挨拶するように」という表現から擬人法が用いられている。丸い火が、あっという間に消えたことはわかる。

4 異なる音で同義語のオノマトペ

続いて共通の意味、共通の動詞を修飾している語を抽出する。3と同様、同じのオノマトペが複数回使用されている際はA1、A2と記す。

A1:懐に入れたなり便所に入ったらすぼりと後架の中に落としてしまった。仕方がないからのそのそ出てきて、実はこれこれだと清に話したところが、

A2:おれの革靴を2つ引ったくって、のそのそ歩き出した。

B:どこか具合が悪いようにそろそろと出て来て

A1、A2、Bには「歩く」という共通の動詞を修飾している。A1、A2は鈍い動きでてきぱきせずに歩くさまを表している。続いてBは動作が静かに緩やかに行われるさまを表している。重いイメージがある「のそのそ」より、「そろそろ」の方が儂さがある。

A:この敷石の上を車でがらがらと通った時は

B:さっきからごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。

A、Bともに乗り物が動く際に働くオノマトペである。

Aはやや重めのもものが転がる様子を表している。Bは重いものがなんどもぶつかり会ったり、揺れたりして出る低くこもった音のことである。

A:清が越後の笹あめを笹ぐるみむしゃむしゃ食っている

B1:むしゃむしゃたべました。

B2:ぼくぼくとそれを食べていました。

A、B1、B2は「食べる」ということを修飾している。AとB1は勢いよく食べたり噛んだりする様子、またその音を表している。B2の「それ」とは黄いろな雁の足のことである。ば行と「く」が組み合わさっていて、さらに「食べる」を修飾するオノマトペといえ一般的に「ばくばく」だろう。今回は細長いものを食べているので、口をoの形に開けている様子を思い浮かぶことができる。母音をaからoにすることで、その様子を表していると考えられる。

A:おれはここまで考えたら眠くなってぐうぐう寝てしまった。

B:あのきょうだい姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかってによりかかって睡っていました。

どちらも「寝る」ことを修飾している。Aはいびきをかく音、またいびきをかく程よ眠っている様子である。Bは疲れて弱っている様子を表している。BよりAの方が穏やかに眠っている様子が考えられる。

A:車屋が、どちらへ参りますかと云うからだまって尾いてこい、今にわかる、と云ってすたすたやって来た。

B:ジョバンニは云いながら、まるでね上がりたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、

A、Bともに歩くに関係している語である。Aは足取りも軽く、早く歩く様子である。B「こつこつ」のみに注目すると、角のある硬いものが連続でぶつかる軽めの音という意味がある。「足をこつこつ鳴らす」とあるので、ここでの「こつこつ」は足音である音がわかる。

A:紋付の一重羽織をずたずたにして、向うの方で鼻を拭いている。

B:茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、

Aは坊ちゃんと山嵐が師範生と喧嘩をした後の場面である。そして「ずたずた」は細かく、激しく、切ったり裂いたりされた様子を表している。このことから喧嘩の激しさが伺える。Bはひどく破れたり傷ついたりしている様子を表している。着られている外套は年季が入っていることが分かる。

A:しかし頬っぺたがびりびりしてたまらない。

B:眼をこすってもものぞいても何にも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。

A、B どちらも「痛い」を修飾するオノマトペである。A は坊ちゃんと山嵐が師範生と喧嘩をした後の場面である。「ぴりぴり」は神経が強く刺激されるさまを示す。殴れた頬が腫れていることが想像できる。B について、「しんしん」は辞書には記されていない。同じような意味を持つであろう「じんじん」は痺れや痛みが続く様子を表している。「じんじん」から濁点を取ることで、静かな痛みが伝わってきて心寂しい印象が生まれているのだと考える。

A:清や帰ってきたよと飛び込んだら、あら坊ちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぼたぼたと落とした。

B:女の子は、いきなり両手を顔に当ててしくしく泣いてしまいました。

どちらも「泣く」ことを表すオノマトペである。A の「ぼたぼた」は液体が少しずつたたる様子を表している。清の目から涙が一粒、二粒と溢れている情景を想像でき、清の感動が伝わってくる。一方 B の「しくしく」は声を上げずに静かに泣く様子を意味している。一般的に「しくしく泣く」に用いられる。

4 結果

本稿では夏目漱石と宮沢賢治が使うオノマトペを比較対照し、オノマトペへの理解を深めることを目的とした。漱石は一般的に母音がαのものをoに変化させたり、オノマトペを元の形から省略して動詞にしたりしており(ぴくぴく→ぴくつく)、特殊な使い方をしていた。賢治のオノマトペはとりわけ特徴的であるが、漱石も辞書には記されていない独特なオノマトペを使うことが分かった。また、辞書に記されているオノマトペでもいろいろな使い方があり、文章によって印象が変わることが分かった。

5 考察

『坊ちゃん』に用いられているオノマトペは物語の雰囲気をも柔らかいものにしたり、面白おかしいものにしたりする効果があると考えた。『銀河鉄道の夜』に使用されているものは、賢治特有のオノマトペや擬人法を巧みに用いることで、ファンタジーのような独特な世界観や、童話に似た雰囲気が生み出されていると考えた。また、特徴的なオノマトペには音象徴が関わっていると思われる。

謝辞

本研究をするにあたってさまざまなご指導を頂いた横越章先生に感謝申し上げます。一緒に研究をしてくれた岡田欣叡さん、ありがとうございました。

参考文献

夏目漱石「坊ちゃん」 青空文庫

https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/752_14964.html

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」 青空文庫

https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/456_15050.html

日向茂男(1991)『擬音語・擬態語の読本』 小学館

牧田智之(2004)『ぎおんご ぎたいご じしょ』 パイ インターナショナル

田守行啓(2011)「宮沢賢治特有のオノマトペ:賢治独特の非慣習的用法」

<https://u->

[hyogo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=1175&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1&page_id=13&block_id=46](https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=1175&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1&page_id=13&block_id=46)